

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「移民の継承語とエスニックアイデンティティに関する社会言語学的研究」（2021 年度第 1 回・通算第 1 回研究会）

2021 年度第 1 回研究会（通算第 1 回目）

日時：2021 年 5 月 9 日（日）14:00–17:30

場所：Zoom によるオンライン開催

主催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」

報告者：安達真弓（AA 研）

今回の研究会では、研究課題の開始にあたり、代表者である安達から「移民言語研究の方法について、メンバー各自の取り組みに加え、先行研究や国内外の研究動向についての情報共有、および問題意識の共有を行う」という本課題の趣旨と、「量的調査の方法論についての情報共有を行う」という第 1 回研究会の位置づけについての説明があった。その後、3 件の研究報告と討論が行われた。以下に各報告の要旨と、討論の内容をまとめる。

#### 1. 日比谷潤子（AA 研共同研究員，聖心女子学院）

「継承語の変異・変化研究」

本発表では、継承語研究の最新動向を把握するため、トロント大学のグループが進めているプロジェクト（Heritage Language Variation and Change in Toronto、以下 HLVC）の紹介を行った。

1960 年代に始まった言語変異・変化研究は、単一言語話者を主たる対象として発展してきたが、近年では多言語話者もその射程に含むことが多い。これは、世界総人口の半分以上が複数の言語を日常的に使っているという現状に鑑みれば、至極当然と言えよう。

HLVC はこのような潮流のなか、200 万人超の住民が家庭でカナダの二公用語以外の言語を使用しているトロントをフィールドに、10 の継承語（Cantonese, Faetar, Hungarian, Italian, Korean, Polish, Portuguese, Russian, Tagalog, Ukrainian）話者、3 世代の自然談話資料コーパスの作成を進め、多角的な観点から分析を行っている。発表の後半では、このグループが使っている Ethnic Orientation Questionnaire の詳細を解説した。

質疑応答では、質問票の内容が人類学寄りとのコメントがあり、作成にあたり、メキシコ系アメリカ人を対象とする人類学分野での先行研究が参照されたことを紹介した。

2. 松本和子 (AA 研共同研究員, 東京大学)・吉田さち (AA 研共同研究員, 跡見学園女子大学)・奥村晶子 (AA 研共同研究員, 東京大学)

「言語変異におけるエスニシティの役割—首都圏と極東ロシアサハリンにおける4つのディアスポラ変種の事例研究—」

本発表では移民社会に関する言語変異と変化の研究において、話者のエスニシティがどのように分析されてきたのかを考察し、今後の本研究プロジェクトへの適応性を議論しながらエスニシティに関する理解を深めることを目指した。具体的には、トロントに在住する複数の移民コミュニティに関する言語調査で用いられた「Ethnic Orientation Questionnaire」(Hoffman & Walker 2010)を例にとり、質問項目の内容および実際の言語使用との関りを吟味・議論した。次に現在進めている首都圏在住のコリアンとブラジル人、極東ロシアのサハリン州(かつての樺太)在住の日系人と朝鮮人という4つの移民コミュニティに関する研究を事例として取り上げた。当該研究で用いた質問項目と前述の「Ethnic Orientation Questionnaire」との類似点および相違点を明らかにしたうえで、進行中の言語変化に影響を及ぼした質問項目に関して報告した。

主な質疑およびコメントの内容は以下のとおりである。言語変化に影響を及ぼした諸要因は全て話者との対面的なインタラクションに関わるものであったという結論だが、エスニックアイデンティティなどを調査する必要はないと考えているのか、との質問があった。このほか、統計手法に関する質問や移民への差別に関する質問などがあった。今後の研究の方向性に役立てたい。

3. 林徹 (AA 研共同研究員, 放送大学)

「曖昧な態度を取るアンケート回答者の再評価」

量的変数の場合、代表的な値は平均(場合によっては中央値や最頻値も)、ばらつき(散布度・変動)は分散(標準偏差)で表され、それらにより標本データの主な特徴をつかむことができる。しかし、本発表で紹介した、トルコ語の3つの指示詞 *bu*, *şu*, *o* のどれを使うかという質問の回答のようなカテゴリ変数の場合、代表値として最頻値が参照されるが、データのばらつきを要約する指標はあまり注目されることがない。

本発表では、カテゴリ変数のばらつきの指標である相対情報量により回答のばらつきを捉えることで、代表値だけではわからない回答者集団の特徴の一側面を明らかにできること、また、集団の持つばらつきを、一部の「曖昧な態度」を取る回答者からある程度推測できることを提案した。

発表後、従来の調査で「曖昧な態度」を取る回答者が歓迎されなかった原因としての規範的言語観の影響、質問項目を設定するときの調査者による暗黙のバイアスなどについて質問が投げかけられ、刺激的な議論が展開された。

研究会には18名（うち代表者・所員・共同研究員17名）の参加があり、盛況のうちに行われた。

以上  
(文責・安達真弓)